

Title	初期マルクスの周辺：人類と階級の間(1)：都築忠七編「オーエンとチャーティズム：イギリス初期社会主義」(平凡社)1975年を読む
Sub Title	Owen, Chartists and young Marx : between human beings and classes : for 'Documents of early British socialism', edited by Chushichi Tsuzuki
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1976
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.69, No.5 (1976. 6) ,p.346(116)- 352(122)
JaLC DOI	10.14991/001.19760601-0116
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19760601-0116">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19760601-0116</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 初期マルクスの周辺——人類と階級の間—— (1)

——都築忠七編「オーエンとチャーティズム」  
イギリス初期社会主義」(平凡社) 1975 年を読む——

飯田 鼎

## (1)

一般に「初期マルクス」といえば、1844年に書かれたと想定される「経済学・哲学手〔草〕稿」(Karl Marx: Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844; Karl Marx-Friedrich Engels historisch-kritische Gesamtausgabe, im Auftrage des Marx-Engels-Instituts, Moskau, Herausgegeben von V. Adratskij, Erste Abteilung, Bd. 3. Marx-Engels-Verlag G.M.B.H. Berlin, 1932) から、1848年の「共産党宣言」成立に至るまでの、4年間というきわめて短い時期を意味する。それにもかかわらず、この時期は、1844年2月、わずかに最初の合冊版として終わった「独仏年誌」(Deutsch-Französische Jahrbücher)が、A. ルーゲとの共同編集により、パリにおいてドイツ語で発刊されたのをはじめとして、マルクスの「ユダヤ人問題によせて」、「ヘーゲル法哲学批判序説」とエンゲルスの「国民経済学批判大綱」および「イギリスの状態」(カーライル「過去と現在」)、さらに「イギリスにおける労働者階級の状態」に示されるように、マルクスおよびエンゲルスの、観念論と革命的民主主義ないし急進主義から史的唯物論と共産主義への決定的移行の時期にあっている。

とくにエンゲルスは、「国民経済学批判大綱」と「イギリス労働者階級の状態」のなかで、古典派経済学とイギリスの労働運動に深い興味と関心を示し、とりわけ、ロバート・オーエンとチャーティスト運動に高い評価と賞讃をささおいている。マルクスとエンゲルスの「初期マルクス」からの離脱と戦闘的・唯物論的なマルクス主義者への自己形成を決定的なものとしたのは、いうまでもなく1847~8年の恐慌とフランス2月革命にともなうヨーロッパの動乱の状況であったが、

その背景として、イギリス労働運動と社会主義、すなわちオーエン主義とチャーティズムがもっとも重要な意味をもち、彼らのイギリスの状況の評価こそ、「共産党宣言」のなかに結晶するのである。

都築教授による「資料—イギリス初期社会主義—オーエンとチャーティズム」は、イギリスにおける革命的民主主義や労働運動それ自体の研究にとって不可欠であり、有益であることはいうまでもないが、それが「初期マルクスの周辺」として、彼らをドイツ・フランス的な視野から世界史的な視野のなかに投じたという点からみても高く評価される。

## (2)

19世紀初頃から50年代までのイギリス社会主義思想の根底には、労働者階級の運動を基調とする階級的立場と人類全体の普遍的な解放を目指す思想が交錯し、さまざまな面で分ち難く結びついていたことが特徴的である。ロンドン通信協会からロバート・オーエンの活動、そしてチャーティズムに至る思想と運動を一貫して流れているものは、この2つの偉大な思想の相剋であるといっても過言ではない。

この時期のイギリス社会思想史を貫く潮流として、一般につぎの3つをあげるのが普通である。フランス革命を源流とする革命的民主主義に包摂されるさまざまな急進主義、ロバート・オーエンに代表される社会主義と協同主義、そして最後にチャーティズムとして総称される革命的な政治運動であろう。もちろんこのほかに経済的自由主義があげられるが、これは、勃興する産業資本主義のイデオロギーを代表し、社会体制批判の思想ではなかった。これにまして前三者は、相互に複雑に交錯しながらも、全体として、イギリス産業

革命期の労働者階級および急進主義者の運動を指導する思想であったといえよう。しかもこれらは、それぞれ、人類的立場と階級的立場との矛盾と相剋のなかで鎔を削っていたことであり、漸次に前者から後者への移行が顕著な傾向となるのである。

普通選挙権を要求する運動は、すでに1770年代、産業革命の開始期にその活動を開始している。「18世紀イギリス・ジュントリーの最良の代表」といわれたジョン・カートライト(John Cartwright)は、普通選挙権の最初の明白な宣言書「選択せよ」のなかでつぎのようにのべている。

「自分の手で労働する人はすべて財産を持ち、その財産が国家にとって重要であることはまちがいない。ロック氏もみごとに述べている——『人間はすべて、彼自身の身体に財産を持つ。彼の肉体の労働と彼の手の仕事とは、まさしく彼のものだといふことができよう』。さらに忘れてはならないことだが、労働者も職人も、税金をふんだんに支払うことなしには、毎日の食物や必需品、身を包む衣服、仕事に用いる道具を買うことができないのである。……すべての人間は、生来、自由であり、生来平等である。……判事ブラックストーンも『注解書』のなかでつぎのように述べている。『自由な国家では、自由な行為者とみなされる人はすべて、多少とも自分自身の統治者たるべきであり、したがって立法権の少なくとも一部門は、国民全体に帰属すべきである』<sup>(1)</sup>」。

ここには国民的立場が濃厚であり、労働者階級もまた自由な国民を構成する重要な要素としてみなされ、「王座を倒し、権威を蹂躪するために組織される国民」の一部であるとされていることである。普通選挙権の要求は、当時、フランス革命の影響をうけて澎湃としておこりつつあった天賦人權の思想に基づく生存権の主張ともなり、没落途上の小生産者の組織化を促し、黎明期の労働者階級運動への重要な橋頭堡を形づくっ

たのであって、ロンドン通信協会がそれである。スコットランド出身の非国教徒であり、ロンドンで製靴業を営むトマス・ハーディ(Thomas Hardy)は、その「回想録」のなかでつぎのようにのべている。

「身辺いたるところに見られた困窮も、土壤の欠陥ないし土地に住む人の欠点から生ずることはありえず、どこか別のところに原因を求めなければならなかった。ひとたびその探求が始まるや、人民の代表と許称し、しかも実際には、社会の一般的利益より彼ら自身の特殊な利益を優先させる、比較的少数の有力な個人により選び出された人々の腐敗行為に、その原因をあとづけることができたし、そのために非凡な洞察力を必要としなかつた」<sup>(3)</sup>。

人民の立場に立たず一部の特権階級の利益を守るための制度としての議会と腐敗選挙区がすでに問題とされ、告発されている。ロンドン通信協会が、政治的な団体であり、その立場が国民的であり、且つ人類的であるとしても、フランス革命の如く革命的ではなかつた。しかしそれにもかかわらず、革命的団体の名の下に禁圧されるのである。ハーディはつぎのようにいう。

「私の友人でアフリカ人のグスターヴァス・ヴァッサは、今、私の家で彼の生涯の回想録を執筆していますが、彼からあなたが、奴隷貿易という、あの呪われた取引の廃止の熱心な友であることを聞き、そうした事情から、あなたが、人間の権利という広大な基礎の上に立つ自由の熱心な友である、と結論したのです」<sup>(4)</sup>。

これはトム・ペインによって唱えられた「人間の権利」の思想の表明である。ロンドン通信協会は、こうした人類的立場に立って、国民の権利をつぎのように主張する。

「下院の多数は、1万2000人をこえない数の投票人によって選ばれ、人口の多い大都会の多くが、代表を選ぶ一票の投票権すら持たない——……こ

注(1) (John Cartwright), Take Your Choice! Representation and Respect: Imposition and Concept. Annual Parliaments and Liberty: Long Parliaments and Slavery, London, 1776. 都築忠七編「資料イギリス初期社会主義——オーエンとチャーティズム」, 平凡社, 1975年, 8—9頁参照。

(2) 上掲書, 12頁。

(3) Memoir of Thomas Hardy, Founder of, and Secretary to, the London Corresponding Society, for Diffusing Useful Political Knowledge among the People of Great Britain and Ireland, and for promoting Parliamentary Reform, from its Establishment, in Jan. 1792, until his Arrest, on a False Charge of High Treason, on the 12th of May, 1794, Written by himself, London, 1832. 上掲書, 13頁。

(4) 前掲書, 14頁。

のような考慮からわれわれは、英国人民の代表されない人々に選挙権を回復するためのロンドン通信協会<sup>(5)</sup>という名称をとったのです。

決議二および八をみれば明らかなように、ロンドン通信協会の改良主義的性格は明らかであり、国民的立場の明確な表明である。

決議二 未成年、理性の喪失あるいは社会の一般的な規則に対する違反以外いかなるものも、人々を無資格にさせない。

決議八 本協会は、騒動と暴力とに対し、嫌悪の念を表明する。本協会は、無政府ではなく改革を目的とする。したがって権力の濫用に対し協会が用いる、ないし同胞市民に用いさせる唯一の武器は、理性、堅固な意志および意見の一致である<sup>(6)</sup>。

「騒動と暴力とに対し、嫌悪の念を表明する」という主張の背後に、われわれは小生産的・小市民的感情が秘匿されているを感じないだろうか。「騒動と暴力」という誹謗は、労働者の組織に向かって、たえず投げつけられる支配者の相言葉であるし、唯一の武器としての「理性、堅固な意志そして意見の一致」という運動方針は、空想的社会主義を想わせるものがある。ロンドン通信協会の思想は、トム・ペインの革命的民主主義の思想から、オーエンの空想的社会主義までの、広はんな人類解放思想と階級的思想の混淆がみられる。トーマス・スペンスは偉大な思想家である。人間の自由を、自然権としての土地共有の思想のなかに見出し、やがて、リカードウ派社会主義やオーエン主義への途を開いたからである。彼はニューカースルの哲学協会での講演のなかで、つぎのように講演を行った。

「社会を構成する人類は、土地と自由とに関する自然的かつ平等の財産権から、彼らがそうした状態で期待でき、かつ期待すべき利益を得ているかどうか、という問題です。……。そうだとすると、どの人民の国土も、自然のままの状態では、

当然、彼らの共有地であり、各人これに平等の財産をもち、動物、果実その他、その生産物でもって彼自身とその係累とを養う、制限されない自由をもつ<sup>(7)</sup>。

これは、いうまでもなく、「自然権」の宣言であるが、この普遍的・全人類的な思想は、そのまま、資本主義的土地所有へのきびしい告発となりうる。

「土地とそのいっさいの付属物とが、少数者によって要求され、彼らの間で分割されてきたこと、しかもそれが、あたかも彼らがそれを製造し、それが彼らの手による作品であったかのような自信あるしかたで、行われてきたことがわかるであろう。……。最初の土地所有者は、篡奪者であり、暴君だった。その後、彼らの土地を所有した者はすべて相続、購入等の権利によって、彼らからそれを得たのである<sup>(8)</sup>。

この一節をよく読むならば、これが、土地の共有を主張する社会主義的思想の表明ではなく、何人が作ったものでもなく、天の賜物ともいふべき土地は、万人共有のものであるとする自然権の主張と、従って、労働こそが、所有権を基礎づける根拠であることを暗示している点に、重要な意味がある。とりわけ人類的思想とともに、市民的権利の思想の宣言であることがわかる。ここには、貧富の問題は少しも論じられていない。これに比べるならば、リカードウ派社会主義者は、土地所有とならんで、商人資本の役割と富の配分とを、階級的観点から把握しようとする。チャールズ・ホール(Charles Hall)は、トーマス・スペンス(Thomas Spence)にあてて、「あなたや私のような者が国民に役立ちうる唯一の方法は、貧乏人を苦しめる諸悪が文明の制度の直接かつ必然的な結果であり、人間性と人間の諸事情の結果ではないことを、金持と貧乏人に説得することです」と書いたが、「ヨーロッパ諸国民に対する文明の影響」のなかで、確立しつつあった資本主義制度の欠陥を、自然権にもとづく人類的思想よりは階級的思想にもとづいてつぎのように分析する。ま

注(5) 前掲書、15頁。

(6) 前掲書、16頁。

(7) Thomas Spence, The Rights of Man, as Exhibited in a Lecture, Read at the Philosophical Society, in Newcastle, To which is now first added, An Interesting Conversation, Between a Gentleman and the Author, on the Subject of his Scheme. With the Queries sent by the Rev. Mr. J. Murray, to the Society in Defence of the Same. And a Song of Triumph for the People, on the Recovery of Their Long Lost Rights. The Fourth Edition. London: Printed for the Author, and Sold at the Corner of Chancery-Lane, Holborn 1793. Price Four Pence. 上掲書、19頁。

(8) 上掲書、21頁。

ず資本の性質について論ずる。

「商人の資本は、彼らの下で働く職人の労働を通じて彼らが調達する品物の貯えからなっている。商人がほかの富を持つこともあるが、それは、ここでの探求の主題ではない。こうした商品の貯えから、彼らは、それを必要とする人々に供給することができる。そうした人々のきわめて大きな部分は、土地所有者であり、土地の占有者である。この資本家、この製造業者は、現実には土地の所有者であり、彼と同じく、ある量の生活必需品を支配し、処分することができ、彼の共同所有者とでも云うべき人々が行うのと同じように、この生活必需品を与える、ないし与えないことができる」<sup>(9)</sup>。

ここにのべられていることは、産業資本家と土地所有者との密接な関係であるが、この場合、没落する小生産者の側に立っていたリカードウ派社会主義者として、この産業資本は、問屋制資本であるため、商人として意識され、過渡的形態は理解されていない。

「商人は、貧乏人の労働の生産物の一部にあずかることを可能にする手段は、彼らの資本であり、それによって彼らは、職人に仕事の材料を供給し、当時必要な生活の資本を提供することができる。こうした理由で資本は、職人の手の生産物の一部に対する正当な請求権を商人に与える者と考えられている。したがって、この資本の性質を究明することが必要になる」<sup>(10)</sup>。

商人資本と産業資本および土地所有との関係が明確に分析されていないにもかかわらず、後に、マルクスに吸収されることになる剰余価値の視点や国家権力の問題が、この論文のなかに一貫して流れていることに注目しなければならない。すなわち、ホールはつぎのように指摘する。

「貧乏人の生活状態が悪化し、彼らの困窮や苦痛がいっそう耐えがたいものになるにつれ、抵抗の精神も抬頭し、抑制や圧力をかなぐり捨てるため、さまざまな努力が払われるものと恐れられている。……。そのため強圧手段も増強され、財産の安全をはかる法律もふえ、いっそう峻厳なものになるだろう。大きな軍事力も維持されなければ

ならない。要するに軍事政府が樹立され、兵士をして彼らの父母、兄弟姉妹に敵対して行動させ、彼らを親戚知己から引き離し、疎遠にさせるために、兵舎や要塞などに住ませ、彼らを他の臣民から隔離しておかなければならない。そうなれば、この同じ軍事組織が、人類の他の部分に対しても権力を持つことを知って、この権力意識以外の感情を胸中に秘めることもなく、やがて、貧乏人だけでなく金持の主人になることはないであろうか」<sup>(11)</sup>。

この一節には、当時としてはきわめて卓抜な思想が吐露されているとはいえないだろうか。この論文が書かれた時代から1世紀以上も経った1930年代のファシズムの到来を予言しているかのようである。そして今日もなお、世界の一部には、またわが日本にもっとも近いところで、このような軍事的抑圧体制が支配していることをみると、われわれは愈々ホールの慧眼に打たれるのである。しかし彼の現実認識の深さと理論的な鋭利さは、剰余価値についての理論的究明に至って、ますます冴えてくるのである。

「労働者の賃金は、彼の労働の成果ないし産物ではない。すなわち、彼の労働の実際により作られたものではなく、親方が支払うことを同意した価格であり、ほとんどの場合、職人が、彼の労働の全生産物に対し、あるいはそのかわりに受け取ることを強制される額である」<sup>(12)</sup>。

ここではまだ価値における必要労働と剰余労働の認識はみられないけれども、この思想の根底にあるものは、普遍的な人類解放の思想ではなく、明らかに階級的な思想であった。リカードウ派社会主義者として、人類的な立場より、階級的立場が鮮明にあらわれているのは当然であるが、1810年代から30年代、そして50年代に至ってもなお、この人類的立場と階級的立場が、はげしい相剋をとめないながら、イギリス労働運動の思想を形成していく。普遍的な人類思想の上に立って、社会変革を志した者は、いうまでもなく、ロバート・オーエンであり、彼の、ニュー・ラナークの共同出資者獲得のための匿名の趣意書には、「人類が全体の継続的幸福を手に入れる道は、各個人をその幼少時から、その行動範囲内の他のすべての個人の幸福を

注(9) Charles Hall, The Effects of Civilization on the People in European State, originally printed 1805; Phoenix Library ed. London, 1849. 上掲書, 31頁。

(10) 上掲書, 29頁。

(11) 上掲書, 31頁。

誠実に増進する努力をするしかない<sup>(13)</sup>とのべられている観点は、人類全体が「分裂している」という認識に導く。しかもこの分裂の意味は、普遍の人類が階級として分裂しているという現実認識に到達するのではなく、ただ、さまざまな意見に分裂し、不和が醸し出されるというのである。こうした不和の状態が除去されるならば、人類の幸福が実現されるという。

「社会の最大の害悪は、人類が分裂の原則に従って訓練されてきたことから生ずる。ここに提示された諸施策は、次第に個人間の不和の原因を除去し、広く彼らの利益と義務とを一致させるような、容易に実行できる計画を提供することにより、共通目的の遂行にあたって相互利益<sup>(14)</sup>のために、人々を統一しようとするものである」。

しかしこのようなオーエンの思想が、階級の思想によって挑戦をうけずにはおこななかった。トーマス・ホジスキンの「労働権護論」(1825)は、イギリス資本主義体制にたいする痛烈な告発であるとともに、あたかもオーエンの思想にたいする対決の状況を想わせるものがある。

「現在、この国の至るところで、資本と労働とのあいだに深刻な闘争が存在する。ほとんどすべての職種の職人が、賃金上昇を求めて団結し、彼らの雇主は、立法府に保護を訴えている。闘争は、物理的な耐久力の闘争、すなわちだれがいちばん長く持ちこたえることができるかという闘争であるだけでなく、議論と道理の闘争である。労働者が、親方を屈服させることは可能だが、しかし彼らは、自分たちの要求の正当性を公衆に悟らせなければならぬ<sup>(15)</sup>」。

「自分たちの要求の正当性」を公衆に悟らせるための論拠として、「必要とされるにしたがって、すべての物を生産するのは労働であり、貯えられた、ないしあらかじめ準備された<sup>(16)</sup>と云いうるものは、労働の熟練

だけである<sup>(16)</sup>」。「人間労働」といわずに、「労働の熟練」として、傍点で強調しているのは何故であろうか。

思うにこれは、彼の経済学的認識と密接な関係があるように思われる。ホジスキンは、リカードの資本概念、固定資本と流動資本をそのまま援用し、とくに前者、すなわち「道具や機械のような固定資本が、労働の生産物である」ことは、「資本の要求を最も熱心に弁護する人々もこれを認めている」として、その本質を、「資本とは、教会や国家と同じように、あるいはその他、どのようなものであれ、人類の他の部分から財産をまきあげる人々が、そのまき上げる手を隠すために案出した一般的な名称と同じように、一種の神秘的な言葉である、とだれしも信じたくなるほどである<sup>(17)</sup>」。このなかには、「国家とは、ブルジョアジーがプロレタリアを搾取するための手段である」という F. エンゲルスにみられる国家観に共通するものがみられる。そして、つぎの一節は、「宗教は阿片である」とするマルクスのキリスト教観を想わせるものがある。

「資本は一種の偶像であり、人間はその前でひれ伏すように求められ、そのあいだ、祭壇のうしろでは、狡猾な僧侶が、神に仕えると称して神を冒瀆し、また婦依と報恩のあの甘美な感情、ないしは恐怖と憤懣のあの恐ろしい心情を嘲笑しながら手を差し出し、宗教の名の下に供物を求めてこれを受け取り、着服する——こうした感情や心情のどちらかが人類全体に共通なように見えるのだが、それも彼らが啓発され賢明であるか、あるいは無知で卑屈であるかによるのである<sup>(18)</sup>」。

リカード派社会主義者としてのホジスキンは、オーエンの人類学的観点とは対照的に、明確に階級的観点を把握していることは明らかである。オーエンと同時代人であり、その思想と運動から大きな感化を受けたにもかかわらず、相対的に独自性を保ち、オーエンの思想との関連で、もっとも興味ある対比を示すのは

注(12) 上掲書, 33頁。

(13) (Robert Owen), A Statesman regarding the New Lanark Establishment, Edinburgh, printed by John Moir, 1812. 上掲書, 51頁。

(14) Robert Owen, 'Report to the Committee of the Association for the Relief of the Manufacturing and Labouring Poor, referred to the Committee of the House of Commons on the Poor Laws, March, 1817', Appendix 1, The Life of Robert Owen, Vol. I. A. (1858), pp. 53-64. 上掲書, 84頁。

(15) A Labour (Thomas Hodgskin), Labour Defended against the Claims of Capital; Or, the Unproductiveness of Capital proved with Reference to the Present Combinations amongst Journeymen, London, 1825. 上掲書, 110頁。

(16) 上掲書, 111頁。

(17) 上掲書, 112頁。

(18) 上掲書, 112頁。

ウィリアム・トムソンであろう。彼は、その「労働の報酬」のなかで、ホジスキンの立場に同調しつつ、つぎのようにのべている。

「いわれない資本の要求も、資本そのものの富を創造する特質に基づくものだ、と彼らに味方する著述家たちが愚かな申し立てを行っているが、これに対して私の友人で仲間の労働者である著者が、その『労働権護論』のなかで述べたほとんどすべての意見に、私は賛同する……。どうみても『知的労働者』(ホジスキンのこと)が提唱しているとしか思われぬ『個人的競争による労働』の組織の下では、資本家から国民生産物の分け前を取り上げることは、明らかに不正であるばかりでなく、実行不可能だろうということが多分わかるだろう。『協同的産業組織』のみが、だれにも危害を加えずに彼の希望を実行に移すことができる。この組織の下では、知的労働者も筋肉労働者と同じように、<sup>(19)</sup>すべての労働者が資本家になる」。

この一節に反映しているものは、いうまでもなく、オーエンの社会主義に特徴的な協同の思想である。また、ホジスキンの意見に全面的に賛成であるとのべながらも、その個人主義的立場に批判的で、「協同的産業組織」への労働者の参加を強調しており、その意味では、階級的視点は、協同主義の下に第二義的な意義をあたえられているように思われる。あるいは、それよりもむしろ、普遍人類的な視点が濃厚であるとさえいえよう。すなわち、つぎのようにいう。

「すべての活動的な労働者が、厳密にその労働の全生産物を自分で消費するならば、その結果はどうなるだろう。老人は飢えるだろう。幼い者も飢えるだろう。子供を生み、育てる多くの婦人も飢えるだろう。……個々の生産者がすべて、自己の労働の全生産物を所有すべきであり、法律によって、その使用を確保すべきことが真実であるにしても、彼は、このような法の是認につけ込むべきではなく、彼の労働の生産物を他人と分け合うべきである、ということもひとしく真実である。さもなければ人類は、自己を保存できないだろう<sup>(20)</sup>(但し、傍点引用者)。

ここには、労働者の協同組織の運動を通じて、人類

解放の思想に到達しようとする努力がにじみ出ているのを見ることができないであろうか。そしてこの「階級思想」と「普遍人類的な思想」の相剋と葛藤は、オーエンの活躍がもっともいちじるしかった1830年代になると、ますます明瞭となり、チャーティスト運動の思想のなかにさえ認めることができるのである。

(3)

普通選挙権の獲得に象徴される政治上の権利のための運動——チャーティズムは、それ自体、人間の基本的な権利であり、まさに普遍人類的な要求を実現しようとしたものであった。しかしロバート・オーエンにみられる人類的思想や協同主義は、このチャーティズムを政治的急進主義として批判し、政治的急進主義もまた、オーエンのこのような立場を拒否した。「ブアマンズ・ガーディアン」はつぎのように訴える。

「数百万の勤労者が声を一つにして、彼らの政治的権利を要求するとき、オーエン主義者のつまらない取引に一般の人々の関心をそらそうとする試みは、そうした不誠実な行為が当然うけるべき非難を買うだろう、とわれわれは思う。

そこですべての協同組合主義者に、政治的権利を要求させ、彼らを労働者階級に合流させよう。なぜなら法律をつくる人々を選挙する権利をオーエン氏と彼の友人たちは軽蔑するかもしれないが、それにもかかわらず労働者階級は、それがなければいつまでも不正な立法の犠牲でいなければならないことを十分によく知っているからである。この重要な権利がなければ、彼らが土地の略奪者、独占人、および資本家の飽くなき強要に対する政治的保護を求めても徒勞である。彼らもよく知っているように、この権利がなかったために、彼らは現在のようにみじめな奴隷にされたのであり、そしてその権利を所有するまで、法律や政府のない国で、砂漠のアラブ人のあいだに住んでいるかのように、彼らが稼いだ生産物を片っぱしから奪われる状態に<sup>(21)</sup>いなければならないのである。

この一節はまことに、オーエンの変革の思想としての弱さを鋭く指摘しているといえよう。オーエン主義

注(19) 上掲書、118頁。

(20) 上掲書、118頁。

(21) 'Co-operation—Mr. Owen', Poor Man's Guardian, 1 Sept. 1832; 'Political Right versus Mr. Owen's Plan', Ibid., 22 Sept. 1832; 'Co-operation v. Radical Reform', Ibid., 29 Sept. 1832. 上掲書、179頁。

的協同主義の限界について、労働者の政治的権利を主張する立場に立つワトソン (James Watson) が、つぎのようにのべているのが注目されよう。

「いつの時代でも、人民の手に支配権がある国民は最も偉大である。いつの時代でも、人民が彼らの法律を作ることにかかわり合うその程度に比例して盛んになる。協同組合主義者は、急進的議会改革を第二義的なものと考えているらしいが、それならば聞きたい。彼ら急進主義者は、今、改革のために戦っているが、彼ら<sup>(22)</sup>がその一部分をすでに獲得していなかったなら、そもそも現在の討論会を開催できたであろうか」。

明確な階級的視点を欠いたままに、ただ人類的視点のみを強調することの危険性を鋭く衝いているようにみえる。

チャーティズムは、普通選挙権を、人間の基本的権

利、普遍人類的思想の具体化として表明したものであるが、革命的政治運動としてのチャーティズムにおいてすら、「人類」はすなわち「男性」を意味した。人類の半分をしめる女性の権利について、アンナ・ウィーラーは、つぎのように擁護する。

「婦人の立法上の権利は、男子の司法的機能から独立してではなく、それらと関連を保ちながら行使されるべきである。婦人は立法議会にあって、それが国の議会であろうと、地域社会のそれであろうと、同性のために立法する (サン・シモン主義者の、解放された婦人たちはそうすることを要求されているが) <sup>(23)</sup> のではなく、同性を代表すべきである」。

以上にみるように、1830年代のイギリス労働運動および社会主義の潮流のなかには、色濃く、普遍的な人類的視点 (オーエン主義) と階級的視点との交錯と相剋をみることができ (未完)。 (経済学部教授)

注(22) 上掲書, 179頁。

(23) (Mrs. Anna Wheeler), 'To the Editor of the Crisis', Crisis, 31 Aug. 1883. 上掲書, 184頁。